



## 2. 胸と背中の中の臓器

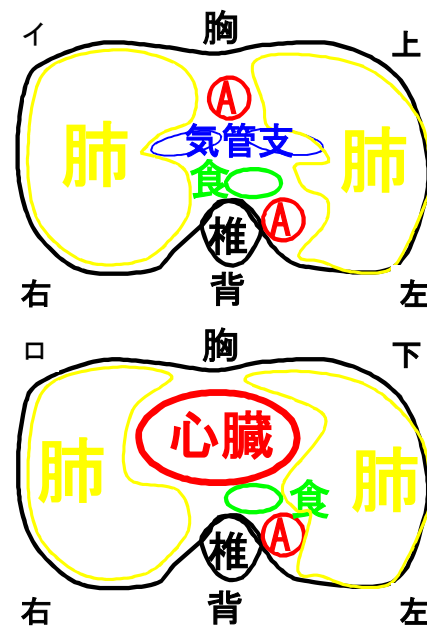
右に胸部CT検査の模式図を示しました。胸を輪切りにした図で、上が乳首と鎖骨の間、下が乳首付近の高さです。

上の図で見ると、中央部では胸側から、大動脈弓 (A)、気管支、食道、大動脈 (A) と背中に続きます。これらを取り囲むように肺があります。下の図では、心臓、食道、大動脈の順です。同様に肺が心臓を取り囲んでいます。

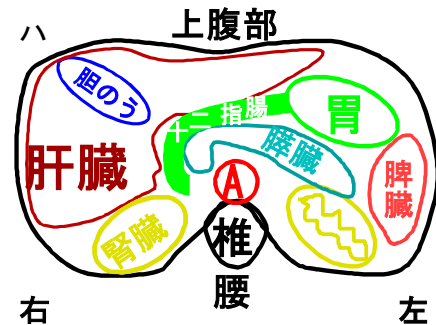
これらの図から、心臓が真ん中から少し前、食道が心臓の裏で背中側にあることがわかります。この2つは接しているためどちらの痛みか区別しにくいことがおわかりでしょう。大動脈 (A) や食道は縦長なので、痛む場合も縦に痛みが広がったり移動したりするのが特徴です。特に大動脈の痛みは激烈です。それもそのはず血管が裂ける事による痛みだからです。

気管支や肺はどうでしょうか？気管支は空気が入り出す管なので、痛みが出るような炎症や腫瘍ではたいていセキやタンを伴います。肺は空気から血液に酸素を取り入れる場所なので、水分 (血) を少し吸ったスポンジのような構造をしています。ス

ポンジはクッションのようにブカブカしているため、癌や炎症があってもよほど大きくなり他の場所に食い込まなければ、通常痛むことはありません。ただ、気胸などで肺がつぶれてしまったり、肺の血管が詰まる肺梗塞を起こした場合は痛む場合があります。



いますが中央部は縦にも横にも走っています。その他一番下には膀胱があり、女性で



## 3. 腹と腰の間の臓器

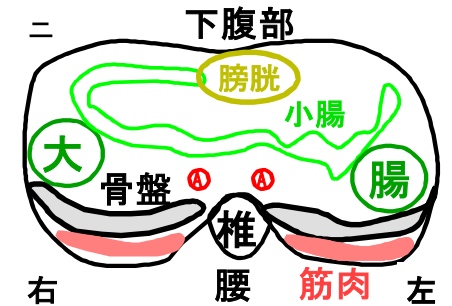
### 1) 上腹部

腹側の右側から真ん中に肝臓、胆のう、左側に胃があります。胃の裏側で腹部大動脈 (A) の前に膵臓があります。そして最も背中側に、左右一対の腎臓、左側には脾臓があります。

### 2) 下腹部

内臓の大部分が小腸と大腸です。小腸はお腹の中で最も大きな部分を占める臓器で縦横無尽にくねくねと広がっています。大腸は体の両はしで縦に向かって伸びています。真ん中付近は横に向かって配置されて

は子宮や卵巣があります。腎臓から膀胱へは尿管というチューブが繋がっています。その他、左右一対の足へ血を送る動脈 (A) があります。これら内臓の背中側には平べったい骨盤という骨があり、その外側には腰の筋肉が付着しています。なお、腰以外ボディの周囲にも腹筋、背筋などの筋肉が巻き付き体を守りながら、様々な動きに対応しています。



## 4. 背部痛を起こす内科疾患

### 解離性大動脈瘤

図イ、ロのAが太い大動脈です。胸の上の方で前から背中側に伸びて腹へと下ります。前側の大動脈が裂けると胸痛、背中側で裂けると背部痛を起こします。血管が引き裂かれる痛みなのでただごとではなく、我慢せず医療機関に直行される人がほとんどです。痛みの特徴は血管を流れる血液に沿って裂けていくため、縦に痛みが移動していきます。

### 狭心症・心筋梗塞

心臓の痛みは主に「胸 (前側) が押される感じ」と表現されます。しかし、背中や肩、首、腕に痛みが広がるとおっしゃる方もあり、一様ではありません。特徴は狭心症なら安静にしていると10分以内で治まり、心筋梗塞なら30分以上続き来ます。心筋梗塞の痛みは尋常でないことが多いので、たいがいの方はすぐ医療機関を受診します。

### 逆流性食道炎 (胃食道逆流症)

心臓の裏側に寄り添う臓器なので心臓の痛みと間違えられます。心臓カテーテルをやったけど異常がなく、心臓の薬を飲んでも良くならないと言った方に良く見られます。

ゲップがよく出る、酸っぱい水が上がる、口が苦い・くさいなどの胃からの逆流がイメージできる特徴が胸の痛みに加わります。また逆流しやすい状況、例えば食事を食べた後、横になって寝たとき、お腹が圧迫される姿勢を取ったときに背中側の痛みがでます。太ると痛みが強まるのも特徴的です。胸が焼け付く感じがした、胸や背中がチリチリするなどのもこれです。

胃酸の逆流が痛みの原因なので、水を一口飲んだらスッと痛みが消えたなどが胃食道逆流症の典型です。

### 筋肉痛による背部痛・腰痛

背部痛や腰痛があると多くの人は恐ろしい内臓の病気を考えてしまうようです。ところが、図にもあるようにボディの周囲は筋肉で囲まれており、痛みの最も多い原因は筋肉痛です。

筋肉痛による背部痛や腰痛は、体を動かすと痛みが出ます。体を動かさなくても痛みが出る内臓性の痛みと対照的です。また、痛い部分を押しみて痛みが強まったり、逆に気

持ちよく楽になるようなら筋肉痛の可能性が高いと考えられます。マッサージや入浴が効果的なのも筋肉痛の特徴です。湿布や塗り薬が効く場合も同様です。

救急車を呼ぶべき痛みは別ですが、背中や腰が痛くなった場合はまず、痛い部分を手で押してみてください。体を動かしたり姿勢を変えて痛みのかたも確認してみましょう。まずは筋肉痛の有無を探ることが基本です。